Wolfram における Amplificatio
—Hartmann, Gottfried との文体比較—

須澤　通

0.　Wolfram von Eschenbach には，Hartmann von Aue の明晰な言語表現と優雅な文体，また Gottfried von Straßburg の表現と内容の一致という言語哲学に則ったことばの審美的な美しさと論理的な明晰さが見られないばかりか，彼自身特定の Stilideal を持たないとさえいわれる[1]。

Wolfram の文体は，彼と Gottfried の文学的 Fehde[2]によって示されるように，晦渋難解，詰屈（krump）[3]で，その特徴は，様々な言い換え形式　die vogele wâren baz geriten（119,5）［鳥たちはより足の速い馬に乗っていた］；　比喩　er was riuse und vengec vach（317,28）［彼はやなであり魚を捕らえる囲であった］；　破格構文　bin ich vor gote erkennt / sô daz mîn sündehafter lîp, / und hân ich kind, dar zuo mîn wîp, / daz diu des pflihte sulen hân（783,6-9）［私が神の前にて認められ，そのために罪深い私や，子供たちまでいるそうだが，それに私の妻と，これらが皆それに与るようになるというのなら］；構文混交　da ergienc dô dehein ander wal, / wan die diu schrift ame grâl / hête ze hêrren in benant（796,17-19）［そこでは，グラールに現れた文字が彼らに主人として指定した以外の選択は行われなかった］など[4]に見ることができる。

Gottfried に「注解を魔法の書で探すことが必要」[5]とまで言わせた極端なまでの意味論的あるいは文法的不整合からなるこれらの文体とは対照的に，Wolfram にはまた，表出の特定部分をことばを重ねることによって強調，もしくはより詳細に説明する，彼独特の Stilfigur が数多く見られる。本稿ではこの Amplificatio（敷衍）をとりあげ，この文体の分析と，Hartmann[6]，Gottfried[7]との比較によって，Wolfram[8]の文体の特徴を考察してみたい。

1.　Wolfram の Amplificatio の特徴は，人物の長所を他の人物と比較することによって鮮明にする文に見ることができる[9]。

Condwîr âmûrs ir schîn / doch schiet von disen strîten:
Jeschûten, Enîten, / und Cunnewâren de Lâlant,
und swâ man lobes die besten vant, / dâ man vrouwen schoene gewuoc,
ir glastes schîn vast under sluoc, / und bêder Isalden.
jâ muose prîses walden / Condwîr âmûrs:　　Pz. 187, 12-21

（コンドゥヴィーラームールスの美しさはしかしながらこの競争で抜きん出ていた。イェシューテ，エニーテ，そしてラーラントのクンネヴァーレ，また，女性の美しさで最高の称賛を得た女性たちが見出されるところでも，彼女の輝いた美しさは彼女たちとの

競争を圧倒した。二人のイゾルデに対しても同様である。まことに，賞を得たのはコンドゥヴィーラームールスであった。）

上記の用例では，Kondwiramurs と Parzival がはじめて顔を合わせた場面で，彼女の美しさを Wolfram は自身の作中人物の他に，Hartmann および Eilhart von Oberg における人物との比較で強調する。

der selbe half daz Anfortas / wart gesunt unt wol genas.
swaz der Franzoys heizet flôrî, / der glast kom sînem velle bî.
Parzivâls schoene was nu ein wint, / und Absalôn Dâvîdes kint,
von Ascalûn Vergulaht, / und al den schoene was geslaht,
unt des man Gahmurete jach / dô man in în zogen sach
ze Kanvoleiz sô wünneclîch, / ir deheins schoene was der gelîch,
die Anfortas ûz siechheit truoc. Pz. 796, 3-15

（その方がお助けになり，アンフォルタスは回復し，癒された。するとフランス人が花のようなと形容する輝きが彼の肌に現れた。パルツィヴァールの美しさも今では無に等しかったし，ダーヴィートの子アプザローン，アスカルーンのフェルグラハト，それに生まれつき美しさが備わったすべての人たち，またガハムレトが堂々とカンヴォレイスに入城したのを目にして語られたもの，彼らのうち誰の美しさもアンフォルタスが病から癒えて得た美しさには比べうべくもなかった。）

ここでは，Parzival の問いかけによって癒され，健康を回復した Anfortas の美しさが，Parzival のほか，Wolfram の作中人物とともに旧約聖書の人物等との比較によって説明される。

この様な語法は，Hartmann の"Iwein"では見られないが，彼の初期の作品"Erec"で，Erec の知恵，美しさ，強さ，寛大さが，それぞれ旧約聖書に記された Salomon，Absalom，Samson，そして歴史上の大王 Alexander と対等に評価された 1 例[10]，Gottfried の"Tristan"で Isolde の美しさをギリシャ神話の Helena と比較した 1 例[11]の用例を見ることができる。

しかし何より Wolfram の特異な Amplificatio として，表出の特定部分をより大きな意味の広がり，強さを持つことばとの比較によって強調する Incrementum，特に，詳細な比較を避けた簡潔形の âne（= excepto = außer）-Incrementum をあげることができよう。Heinrich Lausberg は，この Incrementum の例として，古典ラテン語から一つの典拠を示している[12]。

quo pulchrior alter non fuit excepto Laurentis corpore Turni Aeneis 7, 649

（美しさの点では容姿優れたラウレンテスの人トゥルヌスを除けばこれほど優れた人はいなかった。）

この excepto を用いた Comparatio（比較文）はまさに，ここで取り上げた Wolfram の âne（außer）-Incrementum と一致し，ここに Wolfram の，またドイツ宮廷詩人の文体の Antike からの影響を見ることができる。

Wolfram は，Gawan が後に彼の妃となる Orgeluse とはじめて出会った場面で，彼女の美しさを，美貌では彼女に勝るとも劣らない Parzival の妃 Condwiramurs との比較によって鮮明にする。

dâ vand er, des in niht verdrôz, / ein alsô clâre vrouwen,
die er gerne muose schouwen, / aller wîbes varwe ein bêâ flûrs.
âne Condwîrn âmûrs / wart nie geborn sô schoener lîp. Pz. 508, 18-23
（そこで彼は，決して見飽きぬもの，すなわち彼がずっと見つめていたいほどきれいな婦人，すべての美しい女性の中の一本の麗しき花を見つけた。コンドゥヴィーラームールスを別にすれば，これほど美しいひとがこの世に生まれたためしはなかった。）

以下の âne-Incrementum では，Gawan と戦った Lischoys Gwelljus および Artus 王妃 Ginover のもとにいる女性たちに対する称賛が，それぞれ，勇士 Ither，および，最も優れた女性として称えられる Condwiramurs と Orgeluse との比較によって強調される。

sô manege tugent diu gotes craft / in mannes herze nie gestiez,
ân Ithêrn von Gahaviez. Pz. 559, 6-8
（神は今までガヘフィエスのイテールを除いて，誰の心にも，彼ほど多くの徳を授けることはなかった。）

âne Parzivâles wîp / unt ân Orgelûsen lîp
sone erkenne ich ûf der erde / bî toufe kein sô werde. Pz. 645, 27-30
（パルツィヴァールの奥方とオルゲルーゼを除けば，私は世のキリスト教徒たちの中でこの人たちほど優れた女性を知りません。）

この他，人物以外にも国，都市の富強さ，広大さも，この点でより優れた国，都市との比較によって強調される用例も見られる。

ir hete Acratôn genuoc, / diu âne Babylône ie truoc
ame grif die groesten wîte / nâch heiden worte strîte. Pz. 399, 17-20
（異教徒たちの言い争うところによると，面積でバビロンを除くとこれまでに最大の広さを持っていたアクラトーンの町も，これら＜たくさんの宮殿と塔＞を持つなら十分であったろう。）

この様な構文では，称賛の対象は，grammatische Bedeutung のレベルで，除外の前置詞と結び付いた比較の対象の下位に置かれる。しかし Wolfram における âne-Incrementum

では，両者の評価に関する程度の相違が問題となるのではなく，称賛の対象と，これより大きな意味を持ち，より優位な比較の対象はÄußerungsbedeutungのレベルで相対化され，前者は後者によって，そのより高い評価の域にまで引き上げられる。これによって前者の称賛は具体化され，強調されることになる。Hans Eggersはこの âne-Incrementum をWolframだけに見られる特異なStilfigurとみる。

> Jedenfalls kann ich mich nicht erinnern, dieser besonderen Form des Incrementum mit ihrer preisenden und dennoch von der höchsten Stufe eingeschränkten Hervorhebung in der deutschen Epik des Mittelalters außer bei Wolfram begegnet zu sein.[13)]

より優れたものとの相対の中で，称賛の度合いを高め，具体化する効果を狙った âne-Incrementum は，Gottfriedには見られないものの，Hartmannでは，"Erec"および"Iwein"で，それぞれ2例，計4例の用例が見られる。しかし，この構文は，"Iwein"の1例を除く3例で，Wolframのそれとは対照的に用いられている。すなわちここでは，称賛の対象は，賛美の度合において，比較の対象に明確に凌駕される。さらに，比較の対象の優位性は，後続の文によってなおも説明され，強調される。

> âne Êrecken fil de roi Lac / sô bejagete dâ niemen mêre:
> wan er bejagete guot und êre.　　Erec 2749-2751
> （ラク王の息子エーレクを除けば誰一人これ以上の成功を収めるものはいなかった。なぜなら彼＜ガーヴェイン＞は財と名声を収めたから。）

ここで，Erecとの比較によって，Gaweinの成功が称賛されるが，称賛の度合では，Erecが Gaweinより上位に置かれる。このことは後続の文によって示される。

> Êrec fil de roi Lac / den lâze ich vor den einen tac
> . . . . . / wan man saget, sîn gelich
> ze Britanje enkaeme nie: / kam aber er dar ie,
> daz mohte Êrec wol gesîn:　　Erec 2756-2762
> （ラク王の息子エーレクを私はこの日一日，より上に評価する。なぜなら彼＜ガーヴェイン＞ほどの者は今までにブリタニエに決して現れたことがないと人は言うが，しかしこのような者がこれまでに現れたとしたら，それは確かにエーレクであったと言うことができる。）

次の文では，天幕の下でErecが見かけた婦人の美しさが，âne-Incrementumによって彼の妃Eniteと比較され，具体化される。しかし後続の文によって，ここにおける一連の文が，Eniteの他の追随を許さない美しさを強調する表現法にすぎないことが示される。

> hie under er gesitzen sach / ein wîp, als im sîn herze jach,

daz er bî sînen zîten / âne vrouwen Ênîten
nie dehein schoener hete gesehen. / wan der muoste man et jehen
daz ir wünneclicher lîp / geprîset waere über elliu wîp
diu dô wâren oder noch sint. / Ênîte was des Wunsches kint,
der an ir nihtes vergaz. Erec 8926-8936

（その下に彼は一人の婦人が座っているのを見たが，その時，彼の心は彼に言った。生まれてこのかた，エーニーテ夫人を除いて，これ以上美しい方を見たことがないと。なぜなら彼女に対して，彼女の美しい姿は古今のすべての女性を超えて称賛されるべきものであると誰もが認めざるをえなかった。まことにエーニーテはなにものも欠けることのない理想の子であった。）

"Iwein"では，Iwein の城における豪華なもてなしが，Artus 王の領国でのそれと比較される。しかしここでも Artus の圧倒的な優位性が強調される。

dane irte unstate noch der muot / dane wurde handelunge guot,
daz er âne sîn lant / nie bezzer kurzwîle vant:
wan dem was eht niht gelîch, / unde ist ouch unmügelîch
daz im ûf der erde / iemer iht glîches werde.
Iwein 2655-2662

（そこ＜イーヴェインの城＞では物の不足や心掛けがいたらずに，立派にもてなされることが損なわれるということはなかったので，彼＜アルトゥース王＞は自分の領国を別にすれば，これ以上の楽しいひとときを見出すことはなかった。なぜならこれまでこれ＜王の領国＞に匹敵するものはなかったし，今後ともこの世でなにかがこれと肩を並べるというようなことはありえないことである。）

しかし"Iwein"における次の 1 例は，Wolfram と同様，âne-Incrementum によって，Iwein の妃 Laudine と遜色がない才色兼備の女性の魅力が強調される。

wand sî sîn selbes staete / einen selhen minnen slac sluoc,
die er in sînem herzen truoc, / möhte die ûz sînem gemüete
deheines wîbes güete / iemer benomen hân,
daz hete ouch sî benamen getân. / . . . . .
. . . . . .
ern erkunte sît noch ê / âne sîn selbes wîp
nie süezer rede noch schoenern lîp. Iwein 6504-6516

（なぜなら彼女は彼＜イーヴェイン＞の不動の心にこれほどまでの恋の衝撃を与えたのだ。いつかもし，だれかある女性の魅力が，彼が胸に抱いている女性を，彼の心から追い払うことができたとしたら，彼女こそそうすることができたであろう。....彼はその後もそれ以前も，彼の奥方を除けば，これ以上見事な話術と美しい女性にめぐり合った

ことはなかったのだ。)

Hans Eggers は Werner Schröder に次のように問うている。

Ich erlaube mir, dem weithin belesenen Jubilar die Frage zu stellen, ob diese Sonderform der Stilfigur, wie es mir scheint, wirklich Wolfram allein gehört, oder ob er sie auf eine breitere literarische Basis zu stellen vermag.[14)]

Antike から範を取ったと考えられる âne-Incrementum は，Wolfram 以前の Hartmann においても，数は多くないものの，その用例を見出すことができる。ここでは称賛は比較の対象との相対によって具体化されるが，Stilfigur のアクセントはむしろ，除外の前置詞 âne と結びついた比較の対象に置かれ，これの優位性，あるいはその称賛が強調される。Hartmann の後期の作品"Iwein"における1例では，しかし，称賛の対象は，より優位な比較の対象との相対の中で，称賛の度合において，ほとんど後者の域に達するほどに持ち上げられ，これによって前者の称賛は具体化され，強調される。この Stilfigur の形態は，Wolfram においてさらに発展することになる。

2．　意味上相いれない対立する語や概念どうしを組み合わせて，相補的に一つの概念にまとめ，含蓄のある効果的な表現を生み出す手段の Oxymoron は，Antike に基礎を置くが，詩的表現手段として洗練されるのはドイツ中世盛期の宮廷詩人たちによってである[15)]。しかし Hartmann では，dise edelarmen (Erec 432) [この高貴な貧乏人]；wir sîn mit gesehenden ougen blint (Iwein 1277) [私たちは見える目を持ちながら盲目である] のような古風なタイプのものを除くと，Oxymoron の用例数も多くなく，またこの文体によって表現される概念は，二つの対立概念の調和された状態を示すものの，それを超えた単一概念まで止揚されることはない。このような Hartmann における Oxymoron は，初期の"Erec"と後期の"Iwein"で異なった Stilfigur を形成する。初期の"Erec"では，Oxymoron によって凝縮・短縮された内容は，後続の文によって具体化され，より詳しく説明される。

diu hâte liep bî leide, / als ich iu bescheide.
nû was si ir mannes siges vrô: / sîn wunden weinde si aber dô.
Erec 4502-4505[16)]

(私があなたがたにお伝えするように，彼女は悲しみの中に喜びを覚えた。今や彼女は夫の勝利を喜びながらも，彼の受けた傷を泣いたのである。)

すなわち，ここにおける Oxymoron と後続の文による Stilfigur，もしくは Satzfigur に関しては，表出の特定部分を，ことば，もしくは文を重ねることで強調，あるいは具体的化する効果を狙った語法 Amplificatio とみなされる。これとは逆に"Iwein"における Oxymoron は，これに先行する一連の文の内容を凝縮し，短縮したものである。

und swennern überwindet / und dâ nâch bevindet

wen er hât überwunden, / sone mac er von den stunden
niemer mêre werden vrô. / der Wunsch vluochet im alsô:
im gebrist des leides niht, / swenn im daz liebest geschiht.
wan sweder ir den sige kôs, / der wart mit sige sigelôs.
Iwein 7061-7070[17)]

（そしてもし一方が相手に打ち勝って，その後で自分が誰を倒したのか知ったら，その人はもうその時から決して幸せにはなれない。望んだことが彼には呪いとなる。彼に最も喜ばしいことが起こった時，彼は決して悲しみを免れえない。なぜなら二人のどちらが勝利しても，その者は勝利して敗者となる。）

Oxymoron は Wolfram において量的にも，質的にも発展する。ここでも，Hartmann の "Erec" 同様，Oxymoron によって凝縮された，含みのある内容は，後続の多様な文によって補足され，具体化され，説明される。ここにおいてもまた，Wolfram の特徴的な表現法 Amplificatio を見ることができる。

doch was ir lîp sîn selbes lîp :/ ouch hete er ir den muot gegeben,
sîn leben was der vrouwen leben. Pz. 29, 14-16

（しかし彼女は彼自身であった。彼はまた彼女に心を与えていたので，彼の命はその婦人の命でもあった。）

der helt was trûric unde vrô. / er vröute sich daz man im bôt
grôz êre : in twanc doch ander nôt. / daz was diu strenge minne:
Pz. 34, 30-35, 3.

（勇士は悲しく嬉しかった。彼は自分に大きな栄誉が払われたことを喜んだが，他方苦悩が彼の気持ちを重くした。それは激しいミンネであった。）

unz daz der Wâleis übersach / sîn süeze sûrez ungemach,
sînes wîbes glîchen schîn, / von Pelrapeir der künegîn:
ich meine den geparrierten snê. Pz. 295, 3-7

（そのためヴァーレイスの勇士には彼の甘く苦い苦悩が目に入らなくなった。すなわち彼の妻の，ペルラペイレの女王の似姿が。私は赤く彩られた雪のことをいっているのだが。）

次の用例では，Oxymoron の内容が，後続の Oxymoron によって説明される。ここでは Oxymoronkette の形で，激しいうれし泣きの場面が描写される。

vröude unde jâmer sach / al die daz sehen wolten:
von der liebe si daz dolten. / beidiu lachen unde weinen
kunde ir munt vil wol bescheinen: / von grôzer liebe daz geschach.

Pz. 672, 16-21

（見たいと思った者は誰でも，喜びと嘆きを見た。喜びのために彼らはそうしたのだ。笑うことと泣くことの両方を彼らの口はおおいに行った。大きな喜びゆえにそれは起こったのである。）

Oxymoron の内容が，後続の，意味上対応し合う文成分を互いに交差させることで，コントラストによる効果を狙った文体 Chiasmus[18]の形によって具体化される例も見られる。

du bist der wâren minne blic, / ir schumpfentiure unde ir sic.
vil wîbes vröude an dir gesigt, / der nâch dir jâmer swaere wigt.

Pz. 146, 9-12

（そなた＜パルツィヴァール＞はまことのミンネの輝き，その敗北そしてさらにその勝利。たくさんの女性に対する喜びがそなたを征服し＜ミンネの勝利＞，その後で，苦しみがそなたに重くのしかかるのだ＜ミンネの敗北＞。）

この他に，Oxymoron によって凝縮された内容が，実に136詩節も後の一連の文によって説明される例も見られる。

Wer macht sie vor der diet sô balt? / daz tet diu minne junc unt alt.

Pz. 397, 1-2

（多くの人たちの前で，誰が彼らをかくも大胆にさせたのだろうか？それは若くて老いたミンネのしわざであった。）

この diu minne junc unt alt については，533詩節 9 行以降で，kintheit（Kindlichkeit），jugent（Jugend），alter（Alter），さらに，unvuoge（無分別），tugent（分別）のことばで，ミンネの若さとそれゆえの未熟さ，同時にミンネの老いとそれゆえの賢さが説明され，さらに，これに続く文で，ミンネの持つ両面性が要約される。

wil si mit jungen raeten / ir alten site unstaeten,
sô wirt si schiere an prîse laz. Pz. 533, 17-19

（もしも彼女＜ミンネ＞が若さゆえの無分別な思いつきによって，自身の老いによる豊かな経験をゆるがせにしたら，彼女はたちまちに称賛を失うことになろう。）

これに対して Gottfried の Oxymoron は，Wolfram の Oxymoron とは対照的な Stilfigur を形成する。Gottfried において Oxymoron は彼の物語の中心テーマ，彼の中心思想を示す表現法であり，彼によってこの文体は最も洗練され，高度に彫琢された rhetorische Figur にまで発展した[19]。ここにおける Oxymoron は対立概念の背後にある一つの真実を表現し，また対立概念を止揚することで単一の概念を表現する[20]。Gottfried では，外的表現（äußerer Ausdruck）は内的意味（innere Aussage）の不可欠の要素となり，形

態（Gestalt）と内容（Gehalt）は，誇張表現や装飾なしに，理想的，共生的に一つに結びつくが[21]，その最も代表的な表現法が，彼の Oxymoron である。これに対して Wolfram では，Oxymoron の Gestalt は，読者，聴衆の注意を引くが，直接彼らに Gehalt を伝えることはない。Gestalt に含まれた真の Gehalt は，後続の Amplificatio によって具体化され，強調され，説明される。この点でも，Gottfried と Wolfram の文体は対蹠的であると言うことができる。

以下の 2 例では，Oxymoron は，マルケ王にとって後に最大の喜びと最大の苦しみをもたらし，最終的には自分の生涯の破滅の因となったイゾルデ，恋人トリスタンにとっては最大の喜びと苦しみ，生と死を止揚し，これらを互いの胸，すなわち一つ胸の中に共有した永遠の存在イゾルデについて描写する。

daz ergest und daz beste, / daz Marke an disen zwein enpfie,
mit den sîn leben ouch hine gie, / daz selbe enpfienc er alse wol,
Tr. 12538-12541
（最悪にして最高のもの，これをマルケ王は，彼の人生が破滅に追いやられることになったこの二人から受け取ったのだが，まさにこれを彼はとても喜んで迎えた。）

Tristandes leben und sîn tôt, / sîn lebender tôt, diu blunde Îsôt,
der was wê und ande. Tr. 18467-18469
（トリスタンの生と死，彼の生きながらの死である金髪のイソルデは悲しく，胸が痛んだ。）

次の用例では，Oxymoron は，トリスタンと，恋人イゾルデのもとを去っていくトリスタンを見送るイゾルデの嘆きを表現する。

diu junge künigîn Îsôt / daz sî ir leben unde ir tôt,
ir wunne unde ir ungemache / ze allerêrste gesach. Tr. 9371-9374
（若き女王イゾルデ，彼女が彼女の生と死，彼女の歓喜と悲嘆を一番先に見つけた。）

nu bin ich hie und bin ouch dâ / und enbin doch weder dâ noch hie.
Tr. 18534-18535
（いま私はここにいれば，あそこにもいる。それでいて，あそこにも，ここにもいない。）

3． Hartmann, Wolfram, Gottfried では，Litotes，すなわち反対語の否定によって強い肯定を表したり，控えめな表現によって積極的な表現効果を高める語法によって，積極的な肯定概念を得た語・文と，この概念に相応する肯定語・文とを組み合わせることによって，それぞれ独自の rhetorisch な効果を狙った Stilfigur が見られる[22]。この表現法は，複数の同一概念の組み合わせではあるが，形態からみると，否定語・文と肯定語・文の対置という

対立法となっている[23]。Hartmann の"Erec"では，この対立法は，両者の含み持つ「肯定概念」を強調する機能を持つ。

Gâwein der tugentlîche / gruozte in minneclîche
nâch vriuntlîcher stimme / unde nicht mit grimme. Erec 4898-4901
（器量豊かなガーヴェインは相手に心をこめて，好意のこもった調子で，憎悪を持たずに挨拶した。）

nû war umbe tuot ir daz / daz ir sô lange mich verdaget
daz ir mirs niht ein ende saget? Erec 7991-7993
（何故あなたはそうなさるのか？かくも長いこと私に対して口を閉ざされ，私にそのすべてを話してくださらないとは。）

これに対して Hartmann の"Iwein"では，この表現法における両者の関係は，いわゆる重複の関係ではなく，時間的な縦の関係となり，両者は，概念的には同義でありながら，時間的関係において，それぞれ原因と結果というつながりをもつ。

waz nemet ir iuch an / daz ir sô ungerne lebet
und sus nâch tem tôde strebet? Iwein 4994-4996
（そなたは何故，それほどまでに生きたいとは思わず，＜それゆえ＞それほど死のうとなさるのか？）

sî wâren der schilte / ein ander harte milte:
den schilten wâren sî gehaz. Iwein 7131-7132
（彼らは互いに楯をいたわることをしなかった。＜なぜなら＞彼らは楯に対して憎しみを抱いていたのだ。）

do bestuont dâ nieman mêre: / sî vorhten in sô sêre
dâ vlôch man unde wîp Iwein 7733-7735
（するとそこでは誰も立ち止まってはいなかった。彼らはそれ＜獅子＞をとても恐れた。そこで男も女もその場を逃げ出した。）

Wolfram では，この表現法の否定的および肯定的構成要素は，多くの場合，同一文における Satzglied として，さらに連続した配置で用いられる。このため，両者の互いに対応する概念は，むしろ pleonastisch ととれる程重複しあい，これによって同一，もしくは単一概念の強調という効果がもたらされる。この Stilfigur にも，Wolfram の Amplificatio の特徴が見られる。

sînen gast sach er dort halden, / den jungen, niht den alden,

al gernde strîteclîcher tjost. Pz. 43, 13-15
（彼は彼の客人，若く，老いていない男が，一騎打ちを待ち望んで馬を留めているのを見た。）

nâher drungen die von Zazamanc, / mit grôzer vuore, niht ze cranc.
Pz. 52, 3-4
（ツァツァマンクの諸侯たちが多くの，決して少なくないお供を連れて大挙やって来た。）

si was ein maget, niht ein wîp, Pz. 60, 15
（彼女は乙女の身であり，既婚女性ではなかった。）

der was dicke und niht ze dünne. Pz. 63, 18.
（それ＜唇＞は厚く，決してうすくなかった。）

unt daz er hinderz ors verswanc / einen starken ritter niht ze cranc.
Pz. 174, 17-18
（彼は一人の強い，決して弱くない騎士を馬の背後に突き飛ばしたのだ。）

helt, dîn unbetwungen eit / gît mir grôz liep und crankez leit.
Pz. 270, 25-26
（勇士よ，そなたが自ら進んでなさった誓いは私に大きな喜びと小さな悲しみを与えてくれます。）

dô lac vrou Jeschûte / al weinde bî ir trûte,
vor liebe, unt doch vor leide niht, Pz. 272, 7-9
（そこでイェシューテ夫人は激しく泣きながら彼女の愛する人のかたわらに身を横たえた。それは喜びのためであったが，悲しみのためではなかった。）

Gottfried では，この表現法に関しても，Wolfram とは対照的な Stilfigur となる。ここにおける表現法は様々な形態をとり，その構成要素は互いに並列の関係を取りながらも，それぞれ対応する概念は相補的に融合して，個々の概念では表しえない，状況表現にかなった効果的な単一の意味概念を生み出す。

die pflegent niht, si widerpflegent. Tr. 32
（このような人たちは＜芸術を＞育むのではなく，阻害することになる。）

sine komen danne drâte, / sô koment s'al ze spâte. Tr. 6987-6988
（彼らが急いでやって来ないと，彼らは遅れてしまう。）

er sweic unde jener sweic, / daz ir deweder nie wort gesprach,
Tr. 13622-13623
（彼も相手も黙って，どちらも一言も話さなかった。）

ouch muote sî daz cleine, / daz s'in der wüeste als eine
und âne liute solten sîn. Tr. 16848-16849
（彼らが荒野に，まったく孤独に，そして連れの者たちもなしで住むことになったことは，彼らにとって苦痛ではなかった。）

mîn leit ist doch gemeine, / ine trage ez niht al eine. Tr. 18555-18556
（私の苦しみは二人で一緒のもので，私だけが一人で背負っているものではない。）

swenne er sîn ouge an sî verlie, / sô wart er von dem namen ie
sô riuwec und sô vröudelôs, Tr. 18973-18975
（彼が彼女に目を向けると，その名前ゆえにいつもとても悲しく，やるせない気持ちになった。）

4． 以上，Wolfram における Amplificatio（敷衍），つまり表出の特定部分を，ことばを重ねることによって強調，もしくは具体化する Stilfigur を，特に特徴的な三つの表現法において，同時代の宮廷叙事詩人 Hartmann，Gottfried との比較の中で見てきた。

人物を中心とした対象に対する称賛を，より大きな意味を持ち，より優位に立つ比較の対象との相対化によって，強調もしくは具体化する表現法 âne-Incrementum は，除外の前置詞を用いた簡潔な形式により，Amplificatio としての大きな効果を生み出す，Wolfram 独特の Stilfigur である。同様の構文は Wolfram の先達 Hartmann にもわずかに見られるものの，ここでは"Iwein"の１例を除き，むしろ除外の前置詞 âne と結び付く比較の対象の優位性，賞賛がより強調されることで，Wolfram とは対照的な用法となっている。

対立する概念を組み合わせて，相補的に含蓄のある効果的表現を生み出す Oxymoron は，ドイツ中世宮廷詩人たちの重要な表現形式であるが，この語法を取りこんだ Stilfigur はそれぞれに異なっている。Hartmann では，洗練された文体としての Oxymoron の用例は少ないが，ここでは，短縮された対立法の形式によって凝縮された概念を具体的に説明するために，Oxymoron の前後に文が付加される。この Stilfigur に Amplificatio の傾向を見ることができる。Oxymoron は Wolfram において質的，量的に発達する。ここでは，Oxymoron による含蓄のある意味内容は，Amplificatio の形態をとり，後続の多様な文によって具体化され，説明される。これに対して Gottfried における Oxymoron とその Stilfigur は Wolfram と対蹠的である。彼における Oxymoron の形態と内容は，そのまま，理想的，共生的に一つに結び付き，この文体における両者の対立概念は止揚されることで，奥深い，しかし明晰な単一概念を生み出す。これに対する補足，説明は，ここでは不要であるばかりか，むしろこの文体によって醸し出された概念を大きく損なうことにさえなる。

Litotes を伴った対立形式を取り，同一概念の組み合わせからなる rhetorische Stilfigur

も，ドイツ中世宮廷詩人たちによって好んで用いられた。しかし，ここでも Hartmann, Wolfram, Gottfried における用法はそれぞれ異なる。Hartmann の初期の"Erec"では，ことばの重複により表出の「肯定概念」が強調される Amplificatio の用例が数例見られるが，後期の"Iwein"では，それぞれ相対立した形態を取った表現は，重複の関係ではなく，時間的な縦の関係を取り，互いに同一概念でありながら，因果関係のつながりを持つ。これに対して Wolfram では，形態的に対立した両表現は内容的には pleonastisch と取れるほど重複し，同一・単一概念を強調する。ここでも Wolfram の独特な Stilfigur である Amplificatio の特徴を見ることができる。Gottfried は，この表現法においても，Wolfram と対照的である。彼におけるこの表現法は，Wolfram 同様，積極的に利用され，さらにその形は多様である。この表現法を構成する二つの要素は，ここでは，並列の関係にあり，それぞれ対応する概念は，しかしながら相補的に融合して，含蓄のある単一概念を醸し出す。

Wolfram の文体は，これまで，dunkel にして，krump（詰屈）であるとされ，Hartmann や Gottfried の優雅にして明晰達意の文体とは対照的であり，さらに対蹠的であるとみなされてきた。しかし，Wolfram における文体研究はより広く，Stilfigur の範囲で行われねばならない。ここで取り上げた Wolfram の特徴的な Stilfigur である Amplificatio は，彼の先達である Hartmann において，わずかながらもその用例と，あるいはまた，表現法としての発展の傾向を見ることができる。Wolfram はこれをさらに，独自の rhetorische Stil-und Satzfigur として発展させた。彼の Amplificatio の Stilfigur において，それだけを取り出すと dunkel で krump と受け取られる個々の文体，個々の表現は，本来その Gestalt が含み持っていた Gehalt 以上の含蓄のある概念，明晰達意の意味内容を獲得する。逆に，彼独特の文体は，この Stilfigur によって，特徴ある芸術的，修辞学的効果を彼の文全体にもたらすことになる。Wolfram と特に Gottfried の最も大きな相違は，一方の優雅さと，明晰達意に対する，他方の晦渋難解で詰屈な言語表現にあるのではなく，両者の言語芸術の形式にあると言うことができよう。

註

1) Joachim Bumke: Wolfram von Eschenbach, Stuttgart 1964, S. 15.; Joachim Bumke: Die Wolfram von Eschenbach-Forschung seit 1945. München 1970, S. 97.
2) Gottfried von Straßburg: Tristan 4638ff.; Wolfram von Eschenbach: Willehalm 237, 2ff.
3) Wolfram von Eschenbach: Willehalm 237,11.
4) 須澤　通：ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ：パルツィヴァール　大学書林　1987, 13－18頁。
5) Gottfried von Straßburg: Tristan 4689 f.
6) Hartmann von Aue: Eerc, hrsg. v. A. Leitzmann, 5. Aufl., besorgt von L. Wolff. Tübingen 1972.; Hartmann von Aue: Iwein, hrsg. v. G. F. Benecke u. K. Lachmann, 7. Aufl. neu bearb. v. L. Wolff. Berlin 1968.
7) Gottfried von Straßburg: Tristan, nach dem Text v. Friedrich Ranke, neu hrsg. ins Nhd. übers. mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort v. Rüdiger Krohn, 3. durchges. Aufl. Stuttgart 1984.
8) Wolfram von Eschenbach: Parzival, nach der Ausgabe v. K. Lachmann, Übersetzung u.

Nachwort v. Wolfgang Spiewok. Stuttgart 1997.

9) Hans Eggers: Eine ungewöhnliche Form der Amplificatio in den Epen Wolframs von Eschenbach. In: Studien zu Wolfram von Eschenbach, Festschrift für Werner Schröder zum 75. Geburtstag, hrsg. v. Kurt Gärtner und Joachim Heinzle. Tübingen 1989, S. 13 ff.

10) Hartmann von Aue: Erec 2813 ff.

11) Gottfried von Straßburg: Tristan 8263 ff.

12) Heinrich Lausberg: Handbuch der literarischen Rhetorik, München 1960; Zur Amplificatio: S. 222, § 403. (Vgl. Hans Eggers: a.a.O., S.15.)

13) Hans Eggers: a.a.O., S. 18.

14) Ebd.

15) Wiebke Freytag: Das Oxymoron bei Wolfram, Gottfried und anderen Dichtern des Mittelalters, München 1972, S. 141f.; 須澤 通："poeta doctus" Gottfried の文体の特徴 ―Hartmann との比較において―，信州大学人文学部，人文科学論集<文化コミュニケーション学科編>2001，7頁。

16) Vgl. Hartmann von Aue: Erec 2830 ff.

17) Vgl. Hartmann von Aue: Iwein 7073 ff., 7590 ff.

18) 拙論14頁。

19) Ebd., S. 8, 15f.

20) Ebd., S. 8 f.

21) Gottfried Weber/ Werner Hoffmann : Gottfried von Straßburg, 5. Aufl. Stuttgart 1981, S. 26.; 拙論15頁。

22) Yoshihiro Koga: Die Litotes im Tristan Gottfrieds von Straßburg, Doitu Bungaku 1971, S. 119-131.; 拙論10－12頁。

23) Ebd.